

百首異見

二



陽成院

けくるとは書より落るる水は乃ち此の所を流るなり。こま
後撰集云三輪殿此の所を流るなり。とありけくるとは此高
根よりたゞふちを流るる水は乃ち此の所の水も流るる
まゝて流るる水は乃ち此の所の水も流るる水は乃ち此の
くても流るる水は乃ち此の所の水も流るる水は乃ち此の
湯常言云此大御歌乃ち此の所を流るる水は乃ち此の
その事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ
やと此の水は乃ち此の所の水も流るる水は乃ち此の
これと云ふ事は乃ち此の所の水も流るる水は乃ち此の



河とひさしなる渚の勢い直まおひをいつまひては
うまうぬちをすたぬと来ぬとはけり其序
乃のひをなうてふ北のふた陽をこひをなうて陽
と成ぬとけり唯無のうけをなうてふひ難
あともんふようれいけりて難くふれはあつてん
と水ふせあつて意をこめて無の親よりおしよとて後
まけりてふなかりてふをゆるん兼補師のいせつと
里を陽となうん乃のちを吾家師乃古本とのちりは
幾せとまりてふちたやう物れひさふつてて重なるひ
うと今とたまりとつてふささてまて伊勢集はけふ

乃ちこれ城は雨やまはるさうとて一はそとるおひ
兼盛集よりと渚のうとさなはあつて田原の浦のこひ
かんとくくなくつてとわの意なとてこれあつて
ひまときめ

○改竄云牽より渚のこれのふとて牽よりあつてあとい
ひひ川のなまつあつてとていふ非也とていふ川の渚
はとてくくくちをとり水といひけりいよわも重りて
中々間まといふ事也といふとあつてふ事れ思ひけり
渚とれとてんふあつて渚となつていふいぬとれ
やうよりけりもつてなうて又云讀抄はこれの川の事

とて不流波よりま砂の下となりて川とてなりし一箇
所なりけりまは川とてなりし一箇所なりし一箇所なりし
第十回建教は流波祢乃伊波毛等柳呂尔於都流美
豆代尔毛多由安尔和家於毛波奈久尔毛あま
よれを此河更へてとて初学とては流ひて云云
と此書よりま砂此下となりて一箇所なりし一箇
所なりし一箇所なりし一箇所なりし一箇所なりし
あまてつとていふとてすりまとなりし一箇所
に常陸より流波祢乃伊波毛等柳呂尔毛とありし
ハ砂の下となりし一箇所なりし一箇所なりし一箇
所なりし一箇所なりし一箇所なりし一箇所なりし

乃これ流波とてなりし一箇所なりし一箇所なりし
とありし一箇所なりし一箇所なりし一箇所なりし
いふとてなりし一箇所なりし一箇所なりし一箇
所なりし一箇所なりし一箇所なりし一箇所なりし
とありし一箇所なりし一箇所なりし一箇所なりし
祢乃根とてなりし一箇所なりし一箇所なりし一箇
所なりし一箇所なりし一箇所なりし一箇所なりし
とありし一箇所なりし一箇所なりし一箇所なりし
とありし一箇所なりし一箇所なりし一箇所なりし
す山ハ峯とてなりし一箇所なりし一箇所なりし
也同常陸教は流波祢乃伊波毛等柳呂尔毛とありし
母加奈思古兒哉余等係作流可母毛とありし一箇
所なりし一箇所なりし一箇所なりし一箇所なりし

比具波麻欲能卷廿二部久波祢乃依由流能波奈能
なと布けすといひ新嘉早百合といふさういふ高根の事
おあつた大なり麓といふ也此所當の波波根を只に
とふといふ事あり同意也さきにはあひらの高根とい
て卷よりと宣ひり古今集よりつくるといふ卷のち
繁茂つりといふこれ同く是諸ほまぬ詞といふさ
に違ひりかの常修言ふをすれども波波祢乃祢呂余可須
美高といふと平旦久波祢乃能夜麻乃作志なとい
つるをいづれ根を志れといふ波波ひらふよりて并
や又夢葉の志もさうといふに波波祢乃といふ

くともわれ流るる早川とより三郎の川とさうていふ
まゐるすさといふ三郎の川は寄より傳ひあつた源の名よく
古伝のよくまゐれ下々りけなれりといふ其故は
夢葉卷十七に於て久方天印等水無河隔而最之神
世之恨まゐる卷十四は麻可奈思美佐祢余和波中久可
麻久良能美奈能瀬河泊余思保美都奈武賀前乃
言ひ天乃川に言ふをえとてすれども水さるれといふせ川といひ
後の歌に神はゆえとすり根とをり波乃さうきてみち
なんといふ那まに常はひらけり水れりといふ事さう
いふといふ乃世川といふ又一又卷四に志尔毛爾人者死

スルミナセカハシタユワレヤスツキニヒケニ
當水瀬阿下院吾瘦月日異卷十一浦福而物者不念
水無瀬川有而毛水者遊云物乎ま言急者中波余
勝並水無川絶然云本年有起名湯目古今集云これ
世のわりて終あなくさうみる世のつふうのくこれ
川何ふあつてなとありてあれきつらう事論なり近う
盛衰記は高倉の宮井山城の井これなり又田舎てあれ
一川は流やとんとよませつる流ありこれを井の川
流のまゆなりて水あつる常れまを思やりたるを
わらふさう川と名のまを思はれ記は半流より
流のまのり時あるとつらなりとやうのくよみやす

とつたあ的事よく低き水とつた也さる時おむひくよみ
終つて調はわらん水やらの流軍は五月れ来なりお時雨
してとよませあらんやいされいこれ世川の水無川と名のせ
川の水無之使川なりにあせく此の川の川水無之川
乃意なり事つちあられい終あつる流は流きよく
必光とろく流つてはあつと知へみやとこれと
つたあつととちとせうつとつてなつとつた同
番便也又初番ふこれの河て流来川とれまろくと
く切なせ終つてとひ末たる川と来ぬ流と
はうこれつとつとつとふ末川と来ぬとつと

うねる軒の端をふまたりわたりきといひききた
るはさうにいふありたり今れ家なるは彼俗の草
乃ま事なれを必別也枝の葉一ふたりなりとの
のねる軒なふまたりわたりきといひききた
つるはさうにいふありたり今れ家なるは彼俗の
つるはさうにいふありたり今れ家なるは彼俗の
枝乃ま事なれを必別也枝の葉一ふたりなりとの
ふ軒志はさうにいふありたり今れ家なるは彼俗の
といひききたといひききたといひききたといひ
い別は悔なりある順徳院のふき軒端乃志のふき

まふきすれを此軒志のふき事抄よりききた
まふき同抄は乱れ家なるは彼俗の草乃ま事な
れを必別也枝の葉一ふたりなりとのねる軒
ふ軒志はさうにいふありたり今れ家なるは彼俗の
といひききたといひききたといひききたといひ
い別は悔なりある順徳院のふき軒端乃志のふき
まふきすれを此軒志のふき事抄よりききた
まふき同抄は乱れ家なるは彼俗の草乃ま事な
れを必別也枝の葉一ふたりなりとのねる軒
ふ軒志はさうにいふありたり今れ家なるは彼俗の
といひききたといひききたといひききたといひ
い別は悔なりある順徳院のふき軒端乃志のふき

の祢もろとつはゆきうつまたあふうの祢もろと
つものゝ娘す諸の本ゆとてまをわつこきはあそく
さまは拙もろあふすい何とそとあふなりはつてく
とら拙は志のつうとてはふひうとつかり拙をさるる
あひちうと拙すとはもろり拙れをさるる
たといふまゝのゆひうとんうとらにのさかきと
まて結あれうんとうもちれみれうととつてけ
れうてあひひりぢ其あを得るなりふも強は
ゆちすりと後をうたふうとあふはあふ年な
祢とあふゆきもあふうとあふとつはうとあふ

すりもあきたとつうとあふはまより稚一枕あふ
あ色のねれまぬ拙もろあうたふ千袴とあひあ
ゆえきれうまきぬま色ねすりもろあうとつ
あふうとあふは拙もろたふとつこのねま
あふまねまぬま色とあふうたふてあふつなり
ろまふ事拙もろの常なりとまふはあふと
つあふれまふはあふひきあうとまふとつてあ
あは拙もろあふまふはあふあふとねあふと
あふすうとあふひあふれうとあふとあふと
とあふてあふの拙あふれあふとあふとあふ

修しを春の野に出くすふかなる意人ハ似さふ
あつ門人未下筆文云ある人れをふて親王の湯身
とて雷の野人あつ湯あつ摘まふはあつ一人ハ
若菜あつ日ハ雷乃降るによりてやうき所ハあ
らんといふ事也同集書下あれをて人ハは
かうなる葉年朝臣ゆきつてあひくおつるきとあつ
必多修く抱せられふあつ一人ハてとせつるあ
とわくあつそ款乃るあつ又大和抱治ハ監命娘のき
かき河乃流ふすゆれをとりて修くうめをあつて
修や詞書ハを鮎とれんあつてやうなるあれとあつて

のれりてやうなるあつて葉菜冬甲ハ高安王妻鮎勝娘
子款奥軒姓邊去伊麻夜者好吾漁有藤外東鮎卷廿
羽田之時使葛城王流ハ脊園贈薄妙親命奴等所款
安可祢佐酒比流波多ハ婢旦奴婆多麻乃款流乃伊
刀末仁都賣流前件禮なつてとて要ふつて仲とて
ふすれとまりハあつて若とてあつてより掃あつて
ハとてあつてき苦勞とてあつてとあつての也まて葉流
すはとてあつて朝食夕食ハ抱せん種なれハあつて
あつてあつてあつて男れすといハあつては今乃あ
あまふとてあつて新機葉菜ハあつてあつてあつて

まゝに思ふに、つゝも、人々ありや。詩やを、綿々、曠野、策
 驢、の、と、春、曉、探、蔵、又、魚、叢、な、と、わ、と、思、さ、る、と、い、ふ、と、い、ふ
 人、と、新、た、れ、病、情、也、と、ま、ま、く、聖、慈、乃、興、は、新、て、も、の、勢
 む、を、格、別、乃、ま、ま、く、常、ふ、あ、す、と、い、ふ、と、又、さ、る、か、に、い、ふ、と、
 な、と、い、ふ、男、欲、も、あ、れ、う、い、ふ、と、ま、れ、す、と、い、ふ、は、あ、る、人、今
 乃、所、製、は、實、は、も、あ、る、ま、ま、の、な、ま、は、本、情、と、や、て、極、ま、
 さ、と、い、ふ、と、い、ふ、若、う、と、賊、の、男、う、業、つ、む、な、は、お、お、て、よ
 う、の、欲、あ、る、事、那、い、う、ん、や、さ、る、ま、ま、と、い、ふ、と、親、王、の、御、身
 と、て、あ、る、人、れ、う、乃、あ、る、業、と、い、う、に、雷、と、い、ふ、情、く、聖、原、と、
 何、ふ、ふ、ま、ま、と、い、ふ、ん、や、是、と、大、師、の、ま、ま、乃、原、さ、う、と、い、ふ、原、さ、す

なるとはつたう初學云天皇此清和をうけよと詔せ
攪民乃事とてんうす歌一首ゆく人と和せり例あるにわ
らうと天下此をきき大政はむつては物乃數とをわす只
この風世はううた民衆あるはうたえ外へきもの也
とある

○初學をこれ若輩と仰ふべくは、斯く時常此方にて居れば
芳まなうと我々として祈り、その其善のたまひをまねき
よめしむべきものと云ふは非也。わが素つむお恥ぢたり
常は陰つともあやを過さぬべくして、このあらんやむと云ふ
色所あるといふも同事なるべからざるなり。

乃ちふくろおきとていふ事ありとて近世の如くして
 歸る事にのこひなきとていふ事ありとて近世の如くして
 ふくろおきとていふ事ありとて近世の如くして
 乃ちふくろおきとていふ事ありとて近世の如くして
 乃ちふくろおきとていふ事ありとて近世の如くして

梅子雨後

○初夢を待たずしてきうは今かくほどもぬくまのりきて
相見をむそをなくきあてよあるまじかりとていへどもれ
くと解くも酒をぬひうてわけては寝る何乃限みちん
すんなまはやくて歸りてんとていへどもゆかりはさうり
ゆゑうらふあてて結とさういへどもあつす何にせうてうり
んとつてうりれ意也まて同書は因幡乃山とつて山葉
小佐良乃小田郷より金を出せと陸奥山は雪花とく
とていへどもく廣くつていへどもこれ地名抄は此等の法
美那は梅羽のあまに其の乃とていへどもいへどもて古

ちを轉して出りくこれに過ぐべき事なりゆゑは神に
即ち人なりと云ふ方より善神とすべしとの辯解と云く
事に就ゆと云ふも非也按するべしは事紀と云古事記は
とちや云ふに先神と稱せしれい後人とも云字法とも
けけつりいさそ云々專ら神との三稱する事と云は
る語の意はよくと云く云々也と云ふりちや云ふは
累達の稱也よりて非神凶賊との三稱なり其意を細て
乃ちつて善神との三稱するべし辯解に云書は載と云小
篇と云小瓶と云つけと云いさと云一言ふれり也と云道
せしは小篇れりといふ國のさるる云々はのりふといす

いひなまてと云ふ

○初学は紅葉乃むと云ふはのりふと云ふはのりふと云
まのりふと云ふはのりふと云ふはのりふと云ふはのりふと云
すく風風の画なり其あけのまを云ふと云ふはのりふと云
あてなり其景を物と云ふはのりふと云ふはのりふと云
なりす此画乃と云ふと云ふはのりふと云ふはのりふと云
おれよと云ふはのりふと云ふはのりふと云ふはのりふと云
何と云ふと云ふはのりふと云ふはのりふと云ふはのりふと云
ひやと云ふ其二葉と云ふはのりふと云ふはのりふと云
しう秋のさるるのりふと云ふはのりふと云ふはのりふと云

すれ更^ニ白波の三^ノま^ノふ^ノき^ノも^ノす^ノ同^ノ海^ノ風^ノの画
と素性法師もみち樂^ノれ^ノは^ノく^ノま^ノる^ノ際^ノは^ノお^ノ原^ノも^ノ波
や^ノう^ノん^ノと^ノあり^ノは^ノお^ノ原^ノの^ノた^ノま^ノる^ノみ^ノと^ノあ^ノは^ノ必
波^ノの^ノさ^ノわ^ノく^ノき^ノな^ノま^ノは^ノ中^ノけ^ノり^ノて^ノ其^ノ所^ノを^ノさ^ノえ^ノ我^ノの^ノ
と^ノ知^ノな^ノう^ノや^ノと^ノる^ノ意^ノれ^ノる^ノを^ノ今^ノも^ノ画^ノけ^ノり^ノて^ノは
波^ノの^ノき^ノと^ノ知^ノへ^ノ樂^ノ天^ノと^ノた^ノ遊^ノり^ノと^ノひ^ノく^ノ黄^ノ額^ノ額^ノ林^ノ寒^ノ
有^ノ葉^ノ碧^ノ瑠^ノ璃^ノ水^ノ滌^ノ無^ノ風^ノと^ノう^ノの^ノな^ノと^ノ似^ノり^ノと^ノう^ノと^ノこ
ハ^ノ善^ノ林^ノ乃^ノ大^ノや^ノむ^ノ海^ノの^ノと^ノ守^ノり^ノの^ノお^ノと^ノ今^ノと^ノた^ノり^ノ門
人^ノ管^ノ名^ノ節^ノと^ノ詠^ノふ^ノゆ^ノと^ノこ^ノた^ノり^ノハ^ノ結^ノ瑠^ノ璃^ノ也^ノと^ノう^ノた^ノる^ノ
と^ノあ^ノく^ノす^ノれ^ノと^ノり^ノ今^ノれ^ノあ^ノり^ノ海^ノと^ノせ^ノり^ノ湯^ノ帷^ノ子^ノと^ノ拭^ノ

な^ノと^ノ不^ノ嫌^ノの^ノ果^ノと^ノり^ノた^ノん^ノや^ノう^ノ不^ノ藍^ノな^ノと^ノり^ノて^ノ志^ノり^ノと^ノ
る^ノは^ノ大^ノき^ノの^ノり^ノ難^ノは^ノれ^ノ意^ノり^ノと^ノる^ノの^ノ也^ノと^ノや^ノお^ノり^ノお^ノ原^ノの^ノ
波^ノふ^ノま^ノり^ノて^ノん^ノゆ^ノん^ノと^ノう^ノて^ノる^ノ海^ノと^ノ見^ノな^ノさ^ノる^ノ人^ノ
き^ノと^ノは^ノう^ノり^ノて^ノ目^ノ結^ノ乃^ノ廣^ノ子^ノ滌^ノな^ノと^ノる^ノは^ノ志^ノひ^ノく^ノ似^ノり^ノ
と^ノと^ノう^ノの^ノお^ノり^ノ目^ノ結^ノと^ノ額^ノ額^ノと^ノう^ノの^ノう^ノと^ノう^ノの^ノき^ノ物^ノと^ノ似^ノす
と^ノと^ノう^ノの^ノ目^ノ結^ノと^ノう^ノの^ノ海^ノと^ノう^ノの^ノ事^ノと^ノう^ノ

藤原敏新朝臣

何^ノの^ノえ^ノれ^ノな^ノや^ノう^ノの^ノ波^ノと^ノう^ノの^ノや^ノと^ノえ^ノれ^ノと^ノう^ノの^ノ人^ノと^ノう^ノの^ノ人^ノ
古今集^ノ卷^ノ二^ノ寛^ノ平^ノの^ノ海^ノ時^ノき^ノの^ノの^ノえ^ノれ^ノと^ノう^ノの^ノ人^ノと^ノう^ノの^ノ人^ノ
大^ノう^ノの^ノえ^ノれ^ノと^ノう^ノの^ノ人^ノと^ノう^ノの^ノ人^ノと^ノう^ノの^ノ人^ノと^ノう^ノの^ノ人^ノ

人めとよきけりかなんち知りぬをち歌よたる也うけ
おあふんちひのやそきいも入し也うけよれまひよふ
乃若れ通海まんとまふと調ふはまてあつて三句りね
りひひすう言ふまていつうはねす現ふまはるまふ
おの通海よりつていつうの也すう男若れ思ひは通人
いおまをくねれまふん事痛まきを言のまなふ
うけまともをわけていつうきうわあうんち
初二句いふとまん乃ねの三句はあまて後のまは
ねのあつてふう波乃々きあふ所まで古影いとひ
なまんと入しきまをめてもあまをり也

○初夢三箇問人目を憚るの三かなすうれ若れ海を
いあまふりあひうたれいそれふんちとまんちと佳
うそとつうい非也わてはうれ夢い人ちまん事
なまは其言終ふんちとまんちとまんちとまんちと
て夢竟夢うとまんぬまにまうりてはまのまふれあを
又くまふれあひ人めとまん何事そやと佳うれ
まはうてまうていつうあつてたふうあれまを
たふんちとまんちとねとわたりまふたわち同集
三歌まはまあそわめあひ人めとまんちとまんち
いとまふち同い言まて言あふ人めと佳ふり

なりといふはうき事改まらば

伊勢

難波の燈さりの事れまゝありて此世とあらうとや
新古今集の一歌より難波はまゐる言れ其み
きまはまけりといひまげりといふ世とす
とれやとけりといひけりといふ世とす
なるん所此世といふ言れ縁也者文云これ言
けりまて燈さ盧といふ言れあゝといふ言れ
あゝれあゝの言れ長うぬの言れ大うふけり

いふも也同集雜下小津國の事りてけり言れ見ぬ
花山陰清言はふなる言れあゝぬれ燈さ言れ
世とけりまけりといふ言れあゝぬれ世といふ言れ
一又葉十九長歌は燈さ言れ乃言れ命年とあゝ
よれいふ言れ玉藻乃言れまゝいふ言れ命とけり
意と酒と更なる言れまゝいふ言れ今乃言れあゝ

○初夢云燈さ言れけりの間乃言れまゝいふ言れ
事とれまゝ言れ世といふ言れあゝ言れまゝいふ
やあんとあゝの言れまゝいふ言れあゝ言れまゝ
あゝ言れまゝいふ言れあゝ言れまゝいふ言れ

けつくつと申すはれくやゆきをばけりておとよのんこ
やわらんなどいふをうてうきまのうけは惜す其後惜と
ふくちうへ又言はせとてうてふやとふ葉葉とてう
事と黄葉の過去惜水の過やうなうひ今の詞も身
まうたてとてふたうてうてふれはせとてふ今乃
終るまでとてけりてとてふも非也たうてはせとてふ
命の終るまでとてふんいふより惜まも惜すいふ終る
きと今よりかてうてふあひきうてふすあひきとて
是過りゆくおそれるふ惜ぶうの惜まなきとてお
うてふてふてふのむすれは新調葉葉と黄葉の過や

けつ水の過やうなうてふは彼せいまけりておとよのんこ事と
此世と終りてうてふてふ意とてうたう

元良親王

他ゆきは今つて同く難波るるをけりてとて重んじとててふ
後撰集をよむ事あるそのうち京極の湯見所はけりけ
りあり後撰集よりけりすてあひきうてふてふと
思ひてて他のももけりていまだて事ある物あひのう
さふおけりて同つてとなんてなるや身を惜くさふ
重んじとてあひきうてふてふの意れりてとて事いふ
るあひきうてふとて命はの秋は所よりうてふれ難波なり

素性法師

今んとひしをうにま月れまぬ乃月とまらぬゆふの即
古今集無言部へひとやうとえんといすそへあまふあひ
乃一言にまらぬと申へま月れまぬ乃月れあまて結
更しつゝれといふて人といふとて月とて結成るはあひ
かりやとあまふとたも初二句とてふふとて人とい
たのりあまふとたも初二句とてふふとて人とい
より後撰まといふといひ計を命をなとあまふといひ
改わしつゝ別まといふといひやうとてつゝひあまふ
○初巻は今あまふと人といふれつゝひの三なりとて

い非也なりてはひふまやとてひの三なりとて
まといふとてまはひの三なりとてひの三なりとて
ひといふとてひの三なりとてひの三なりとて
して調とてひの三なりとてひの三なりとて
事也まといふ

文房

古今集秋下是貞乃み其家の秋合れとてあり紀氏れ自
筆也といふ古本は秋合とありて一書ありて
ハ改観はあまふとて新撰集はあまふとて
ハ改観はあまふとて新撰集はあまふとて

豈抑禮者郁子山風緒當之云濫とあり是そ而より多き

卷二十六

郁子とあるところと我よむなりき和名新蔬類の中は郁

月見まはちふおかしき事なれわが心ひつら乃秋はあゝと
古今集秋とは貞乃みれ家の言ふれ歌とあり初學云秋
てふものいふ此下の秋なりを月見むつは乃乃力一のは
とわひたさるるは秋すまじき也改観より里を儒教とて
文集申乃秀白を野とてよまれ秋身あられ此言
と戀子橋中霜月夜秋来只言一人長とて翻案くよ
まれこゝあやとあり

○初學云皇朝乃秋文なとふ唐代古事と聞ふはいま
一きは人の人れするもの也皇朝はかゝるをわく古事れ
わがよとあるぬ故をよつは非也大よる秋は古事と

引きてるぬ思ひなつひとあて其其哉となすを
すのさされい唐にまれ大わすれせよひなるひ聞るれ
この事とそれよりふまをせをわする自然のよまて
更な端なきもの也何ぞ和漢を并すれひまあんとせ
人乃やあらぬ限に古云くつとを尋ふ用ふさあ
すはや皇朝の古事なるん人あぬをを引ひ
んや此の古事とていふ事い過るなりともそ
皆其世人はふ能くやう自然乃文集或を詩經乃頼也
まゝ其題を設てよまんは此端のうさうにわゝひいなり
さうひつらんせよあらぬ故事とてわあくる人乃耳目

よ別まといふの極ふまをてんまんといふ花のまゝの極ふ
之頭補卿の對と命といふのむすめいひはとていふと花
りまゝといふといふ葉卷中二春風之聲尔由名者有去
チイマナラヌトモキミカデニ
而不有今友君之隨意同卷十は靈寸春音山之於尔立
カミミカデトモキミカデニ
霞維立維座君之隨意卷十は吾身一者君之隨意卷廿
ハキミカデニ
は手之伎を我未は伎を我未仁蘇尔なく言ふといふ
れまおまといふといふといふといふといふといふといふ
あふす唯まといふといふといふといふといふといふ
はうまら乃其はれといふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふといふといふといふ
アウサニミカデニ

意依目友まゝ電れまゝといふといふといふといふ
もといふといふといふといふといふといふといふ
あひのまゝといふといふといふといふといふといふ
よといふといふといふといふといふといふといふ
彼乃自然なるもの也大や尔まゝに拘るといふといふ
○政親三郎といふ時幣といふといふといふといふ
信と信といふといふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふといふといふ
といふといふといふといふといふといふといふ

此の代よりある事候へども、せんすりまふ事あるとて、
 されども、わがわらん事、に、あやまはし、一、常、竟、思、い、せんす
 ども、に、更、強、と、い、ひ、神、乃、ま、に、多、向、ま、わ、り、す、り、な、り、と、
 い、ま、せ、と、い、ひ、わ、ま、す、て、い、を、は、と、あ、り、より、此、邊、又、都、と
 山、時、思、と、い、ふ、取、あ、つ、と、い、ひ、と、あ、り、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
 お、ん、と、い、ふ、と、い、ふ、此、院、微、好、と、好、ま、せ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、大、和
 攝、津、河、内、乃、遠、と、い、ひ、と、巡、幸、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
 ゆ、す、り、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
 大、御、供、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
 此、人、を、も、の、證、と、い、ひ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、

ひをねるゝあすといふ例と意違ふ率此の如く
 脈うつられひの事なり一帯とてり。此すも物とてけく
 づるはひの事なりあすといふ事なり。よはやて意
 と調をたづとて同とてり。此張也。まことばふといふは
 大やうなまてまな事あり。ひのくちまの調をたづ
 い業とてり。二のくちまのくちなり。枕とてり。とてはゆる事と
 なれり。また一其外と苗とてり。まゑとてり。なとて。枕とてり
 かけくちまの常なり。こまてり。とてり。揺く枕とてり。あ
 ぬあけくちまのくちまなり。こまてり。とてり。そのひのくち
 まはこまのくちまのくちまなり。そのひのくちまのくちまなり。

とてはも何れもいふ事ありあらずいふ向あす捧けあ
つすといふひきき中にもあすといふ事いふ意
得る人いかに解るれとていかに把握すべしなり
もいふ事なるれい今たあつていふ言のつひ
なまなりされと事いふ湯とていふ脈とていふ角力
とていふ事なりとて其活用をいふ事なり

三條右大臣

あつていふ事なるれい今たあつていふ言のつひ
なまなりされと事いふ湯とていふ脈とていふ角力
とていふ事なりとて其活用をいふ事なり

まは其名をいふ事なるれい今たあつていふ言のつひ
なまなりされと事いふ湯とていふ脈とていふ角力
とていふ事なりとて其活用をいふ事なり

ぬすまふとてあそんで世をたふすものなほい
 くらゐのやとある事誰ぞあうくおぼへし今更上意
 て只今とけりい常の縁うとなくあうく今と内と
 くらゐい専ら極端いものせしゆものまたおぼへ
 ぬたよりあそんでい癖ある事いその数倍とらうと常
 ありふたの相なりをうとあそびいまたあそんで
 なまはさるあふおとらうはとよりあうといさとの
 也つてあそんでいよりいそれとつて憂へん也又極す
 くらゐおぼへとらうはとあふおとらういさとなら
 やあそんでいよりいさあふおとらういさあふ
 となら

ふつと歌をまゝあやすくはり難し。同集は神と云ふ
に々々、歌は神ふつとてう色もせんせむ清正集は廣
備乃みやす所の内さうしてあれとてさういふ文修る所
としてすまふといふものなり。修りて須磨此海人とあるとれ
とへわろこれ座のみさうに類ひもなし。菊補集はと見れば
のちつともうとよき人れうとてあつてもなり元補集
はとみてもうと見ればとなく富とてえん命なうそなど
當時さういふ人れ名とよき事なり。也。後拾遺とて
道雅三位のものとてお虎とてひとねはふくなりふ
々々々なるともまれ長祿集はやくて若衆とてうさかうて

く其の内に居てわかれいふべきものなりや又ふりも
別れとあるを歸するよりいふべきものなりはいつか
男より通つたれ其れ其れなきものなりと云ふより乃
終るなり

貞信公

とて山寄れりみも業をわたりて今てひたひたさるる人
松道集難松亭の院大井川は清きわけてゆきききぬへ
き所也と云ふなり事乃り奏せんとてあり政親
又大井川の難松亭よりある中より取て小山倉の紅
梨にわけていふなり其心とてよきなり今乃仰と

うけ給ふてまの里歸りて其よりまゝに奏聞すなりとある
いふやうの事あり一其折まてゐた所集よりいふ
ゆきききぬへと云ふなり小山倉の紅と云ふ山也此事門人
橋井田忠友の著きなり名漢語訳よりいふなりたきけりふ
いふなり

○初學は大井川の事清きなりとて別にかたり其文
もなれいふ所ある其大むい此小山倉の院の清きなり
いふは延喜七年の事なりと云ふなり其れ其れ清きなり
いふなり此所を清きなりと云ふ仰と云ふなりとてなり
さて後より清きなりと云ふなりと云ふなり清きなり

嘉吉七年九月十一日にくれ育の歌を詠みたりて貫之等歌
なりける事なりふ古今集より後言の端は皇西河より
おとまりたるる日と二所までをみるゝと不審して諸
書より此歌詠ありしに初章此段とせむにむより古今
のくは皇とて書るゝ誤なるや古今集は今とて
天皇とて書るゝ人の例の後人より得るゝひては皇と書
るべきなりとて云り棄るゝは本書より得るゝて
一景樹按するゝふの亭に院大井河清とありは日本
紀略は延長四年十月十日は皇幸大井河有詠歌事
とあり此時なりとくはわづ同月十九日天皇幸大井河

は皇幸とありはやとて貞信公事より棄るゝやとて
たまりありて相違ふありに詠歌ありは詠とせん
詠歌も尤もあらそなりなりとて二つの三つとて
るんとてえむつありむるなりなりとて其詠う
とせむとてあらそむるゝとて詠歌事とてせむはそれ
らとてせむるなりとて此とて公のゆかりの事とて
た大井河の事なりとて詠うとてあらわぬとて
れはこれ大井河の事なりとて嘉吉七年の詠歌より得るゝ
是の詠なりとて大和物語より此歌とて棄るゝなり
とて興あり事なりとて大井河の詠事とて棄るゝなり

乃識者の序文と云はれ十日にありて再昨の九日といふ
也とて史にあらまると按げなむはつうき事也歟と
再昨と云はれ大やきおとつて序文にあらうと云ふ乃
九日と云はれつひくともあるといふ九日也と云はれつひくと
云事明くはれと云紀略に延喜七年九月十日法皇御
文人賦眺望九詠之詩とあるこれより大井河法皇御
日也とては眺望乃御まことふあふすつて約幸乃秋
と其數九首なりといふ同日同題なりといふこと一聖
十一日乃條又伊勢奉幣天皇御八省依光納言恭藏
有實給宣命其日天皇幸大堰河とあり此天皇意大

堰河の二句舊記乃本文より前日十日は法皇の文人云
乃よりあると紀略の撰者なり前史乃誤と云はれく天
皇云と此句と揃へ次乃十一日の條下に属せらるる人云
うと十一日は八省依光納言ありて伊勢奉幣此宣命とた
まふと云ひは大井河乃遊幸あることと云事然らば
あらはれとて舊記は法皇幸此と云ふことありといふ
思ひくはれきたるも本年より脱るるや今知るて九月
十日天皇幸大堰河法皇同幸文人賦眺望九詠之
詩なりとて本文はれと云はれく十日といふより重陽の後
宴るまは其數九首乃詠と云はれ文人太井眺望乃

約と候し其詩題をとりて歌人乃詠とをなす也されは
そもく歌の題のまゝにあらず中ふと轉ゆはたなり
といふ事とけさして霜鶴立洲とありん其ゆゑに彼
序の歌の題目へよりて重れとらんといふれと書
れよりさうてはあつてさきもの形をうつ此時の題と
をみれば白鶴とよまれとふと霜鶴なりと事ある也
又夫本草は延喜七年帝の院の法門の西面西河仍幸
せむ勢あひくふ忠岑新和歌序ふとて其文を引
きとるをんは序文を習之のまゝにあらすといふ
實はゆのくま加へてとあるべき事なりといふ中

あつてさきこれにゆれとらんをせはなりとて中つ
らんきと大鏡なりふ其の序題に貫之乃ゆけり
まづさうとやにけふに推めて也梅すふたを創案
九月九日の南殿にて重陽の宴と賜ふ所會あり十日の
後宴は法皇兼華院にて同く宴賜乃題とあり
文人詩を賦してある事なりと今年はそのまゝと大
井とて題をせよといふれいふ此十日の終宴は法皇乃
大いありなりとあるべきやとて此れと名山の由歌を
あつて此事をありうとせけりせは歌人といふに
記略したる詠歌事とのまゝにあらすなりといふ

ちれや、何より程かは此詩のすゝめはあゝかと思ふ
人あまた然るすゝめ其事せよとてさういふは是より
早に記されたる也とて此詩天の下には詩のまわりと
尚て秋よむとてけいふの歌をくさして公せまふ
いと多しゆぬ習俗なりよりすゝめ詩の事とて大やう弄て
ぢれすゝめはかたより乃勝事とて叫び聲をい書れ
より同紀延喜五年九月十日乃條はた大臣於東宮直
廬賦籍邊有殘菊之詩とあるなり乃難よりより其詩を
あゝとけいふなりなりと詩とていふを斯とて
う書ゆゑは秋といふとてさうあらう御世々の歌合と

ふふ一處とあるをねす古今乃序ふとの習俗と秋とを
好のあゝ埋め人ゝきぬ事となりてまゐれる所は
花すゝめはあすのうのふもあす来あゝり其始め
思ひわゝるゝ人あゝぬとてそれ程乃情をあら
せし中ふ自然は度給のさふ蹴くて其感とての
及ぼる事とてあゝとたりすれなりとて乃大井眺望
の題を詩人乃詠とてわゝるゝとてさゝて秋といふより
久しは情をあらゝひ難ふや其詩のさゝは詠とてさ
ゝて中々諸史は濃くは秋のうへは殘菊とてわゝるゝ
れとて秋乃當なり行幸れとてさゝて乃今よりひ

より集りて此帖より書きて今またおれたまはれり
事多しされに此帖をよみ人々ひきりて新古今集より
やまりて兼補つたりとて入るまた今これをわたり
て述べてありと云ふべき也

源家子朝臣

ふまはるるをきひてさすあまけり人々もさもわきまを
古今集をこれきりてとあるあり山里の所はけいり
われとをききしうまをききし人々もさすわきまの
まをききしうまをききし人々もさすわきまの
ゆゑとてのいふに自持乃とてたがききききき

も心外なるの道徳をいふこれぬまにぬまなり
ききききききききききききききききききき
るたのひは似たり其言そのぬまにぬまに調くつて
とていふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

○改竄は車色と云ふは必車の色はけり
わききききききききききききききききききき
うれきききききききききききききききききき
もきききききききききききききききききき
乃きききききききききききききききききき
おきききききききききききききききききき

吾聞之耳亦好似卷十又言云者三三二回八那田なと
をいふよりいふまできくが此事を耳にきくといふ
そのまゝ平語也との事なりとれどもて古人のわざと作
るものも語也と思ひなむよりこれども清女乃筆此
妙趣なといふ舊説なりより端するにうづめて人目の
人れなる事をしていふより我國といふはあらず耳とさ
ういふさう耳なまは自他乃たういふとやういふ
すととこれ沈む引出るとあるぬ語也

心あてたもろやとん 神楽はさまたせりーとさうれき

古今集秋下白菊乃花と云ふなり初霜の至りて
わくまといふものなりをんとなすは只井はうふ
や折らんもんとわくま花とけりていさおわすこと
朝も深ふおれ色と折れもろくゆ也初二の白いといふ
あてをわんといふきを調はけりておろしる也
○改観はとろやとんい影や初はわすといふんやと
いふろとそれい影の顔はといふやの字と中はあつち也
いふ白菊はおれ花とて人ともいふといふはわくま
菊は咲く初霜をまじけく白く色は同じくおわひ
てまじりて心あてといふはとんや初はわすといふ

とのひ跡きり也是等と頼とをせめて興つてよめ
 也といふといふいんあてといふ人すなれと頼とを
 きて興す人といふといふやた非也といふいふや
 文字とせめていふいんあてといふ人すなれといふ
 といふいふの也されといふ人の意を頼んやといふ
 つらひこれ詞なすといふまに平供といふな詞也又
 秋いふといふまにせめていふ人すなれといふ
 い非すといふ又然といふと終る事いふなすといふ
 つらひこれ詞なすといふまに平供といふな詞也又
 あくまにせめていふいんあてといふ人すなれといふ

世にたつていふ人といふといふやまにけいといふ
 いふといふ人といふいふいふいふいふいふいふ
 まにけいといふいふいふいふいふいふいふ

○初夢をいふやをいふいふいふいふいふいふ
 まねといふ事となす也或ははる重い詞也といふ
 といふいふをいふいふいふいふいふいふいふ
 といふいふ也夢葉は島傳是速之小舟風守年者也經南
 相常無二といふいふいふいふいふいふいふ
 まにけいといふいふいふいふいふいふいふ
 まにけいといふいふいふいふいふいふいふ

うも也なるとすすく何の事とせやされすれり
をうやをんとするはさうふりとの河乃影のよけ
次焉うたの例のそれなりとの言なり又
葉の年者也經南の志まう歌辭より聞え
奇也年者也將經標者無二とて年いふんやと
歩ふてきてるふりあひては個よりて歌をも
たひのりるる卷九は於久礼居而吾波也將急春霞
多奈姑久山平君之城者まゝ於久礼居而吾者也
將急福見野乃秋芽子見都律者奈武子故ふなり
あまも同じてにをはりてまゝいふん我といふんやれ

歌聲乃そと

壬生忠岑

世ゆ乃はまれくえりわつわつとつるはな
古今集三歌しすきとほきあつわつわつとつ
乃そふりと思ひさものあひりて今よふ曉けり
うき抱うと在明のいほまれふ乃枕はあけし初夢云有
明乃月れぬぬきとなや面はくさけりてあつきの
なまけ人乃ほきなまといふ冠帯はあけてふふ曉といふ
言を合さうかと後世の所も又改観はあつあつと
あつとあつの中はけいあつとあつとあつとあつとあつと

すよ云類の所はむざりさまは類のうへ不意歸忘とらる
へしとち抄はけさそてついでに類し

○初巻はせれども人知るふつと細くとはわく
帰るうへふき歸るもよにうのうへ人のけされり
しはつものよく曉れいささの所しとあひなりて
とてふ非也先此言い意解るれふ似く相のう本末
をり合て同ゆりのさまふよりわく解あやま
事はゆり別きなりとつとをけくは解のとくうれとの
は思ひ集ぬらなとてていられぬとさき抱いたしと
あひすてさうたつんちする是はあつ思ひ成ぬら後

は何より曉るなりとささものはなりとてあつ思ひ成ぬ
らとてあつはあつと今いささ地は集るさつむ
きふつひなれちとて思ひ集るさつとてささはさの別き
より代にありて別きより思ひなりて曉るなりとて内
にきさつらうちとてさつとさき抱いたしとあひすてさ
とあひ集るさつと解なすへんやささは語勢とたつひて
せより秋のさふあつ思ひの本と解さつて言を
あつとあひささたさはあつとさつとさつとあつと
と推究むきはいつとたつる事のとささはさつとさ
の書るものは解るは劇場して者ありとらんそれさ

と今の親方うう一意をいふとさういふ方にまのひなを
る其昔ふとけうおまうりてあつたは面白ふもの其
實はわかれし事いふとさういふ事常れる事とされま
てとされる事とさういふわやうなる所と却て親睦をせ
る事とものも統中此方乃後なる田舎の浦翁の語な
とれりといふ其勢よりとまきりて表はせしるく
はううとゆゆりりき其面白きううと語てこれと
まきとせんといふたうとさう事と得へんや意を周
へ又同書は都例奈支の例に良末の約とされしと
ハ顔目無てあるとあれむといふ事とんうてと面強
ツラメナキ

くしてあるといふ言葉は縁をなくしてあるものといひ
てあれうふとけるはうそれとされしは左様と
いふと非也按ふはまされしは無償借れ意をいへて
いふゆる言葉は縁をなさうといふやういふべきは
方よりうつりて後はいふはうむいふといふははるうと
いふといふははるあはむいふといふとあはむははる
むいふといふははるいふなることす福とあらはれし
心なまはははるいふくゆりといふき方なはるははる
冬は都礼毛無將有人年冬十九は都礼毛な久可
礼毛之妹乎なとあはは後のことと同一されいふはう

ふ國ひすともいふにたて月ハ物とあるひくも
きき世の物とあるまじく立派であるいやそつ
まればさすれまはあつひるれより今枕しを
おるものもこれとほめなされ物也といふ例の更
しつゝあつて事をいふ所といふのを世はゆゝゝぬ
顔也といふ例あるむとせよつゝあなハ杉となと
いふ人は同じなれハ俗又面目好といふて其杉を
強きといふ方なうゝこれハひななりと更ハかれ
の情

小園のすゝもつゝつてはてははちあつてひくま
 きとせぬのちとたれまゝにまじりてゐるやうなつ
 まれよきまれまじりあつてゐるより今枕しを
 ねるものもこれとほゞあなさまの物也といふ例の更
 一つめといふ事をつゝあつてゐるもあつてゐ
 顔也といふつてあつてゐるもあつてゐるも
 といふ人は同じまなれははちあつてゐるも
 強きといふ方なうゝはちあつてゐるも
 の侍

武藏国多摩郡國分寺村

本多雄軒家藏



卷二 五十二

44124

百首
 異見

